

司馬史観の問題点

第三回経営者養成研修同窓会（四面参照）で「生論大賞」受賞作を全文朗読した。出席した百余名は理解納得感動してくれた。この新聞は毎月二万二千部配送している。残り二万九百名のうち、前に読まなかった人、忘れてしまった人のために再掲載する。歴史を正しく理解する一助に。

乃木司令官は無能だったのか

あの「坂の上の雲」を読みながら乃木希典大将のあまりの無能さに驚き、愕然としたことを忘れることができない。その意外な事実も少なからず動揺し、思わず自問してしまつた。日本人の大半は乃木大将を崇めているのではないのか、それが日本の常識ではないのか、と。しかし「坂の上の雲」は容赦なく乃木大将をおとしめていた。主人公の秋山兄弟など乃木大将の無能さの影でかすんでしまつている。

大量の資料を基に、ノンフィクションしか書かないとするあの司馬遼太郎が乃木を糾弾しているのだ。間違ひはないだろう。目からうろこが落ちるとはまさにこのことだ。

司馬は「坂の上の雲」の二年前に乃木を主人公にした「殉死」とまた全編に亘り乃木の人格と功績の全否定である。それでも足りず「坂の上の雲」だ。

司馬が乃木を糾弾する理由は、乃木が指揮をとつた日露戦争の旅順攻防戦にある。司馬は「一人の人間の頭脳と性格がこれほどの長期にわたつて災害をもたらした」とまで書いている。確かに旅順戦の三度に及ぶ総攻撃で、乃木率い

た日本軍は一万五千人の死者を出した。日本陸軍史上最悪の犠牲者数である。司馬が乃木を糾弾するのにもつともなことだ。

しかし第一次世界大戦の事例を見ると、要塞という要塞は乃木式の消耗戦を強いる肉弾攻撃を経ずに陥落したところは一つもない。一万五千人という犠牲者も欧州の戦争に比べれば少ないという指摘もある。また、ソ連の革命家のレニンは「ソ連は六年の歳月の旅順を作り上げたが、それをわずか八カ月で陥落させた乃木軍に衝撃を受けた」と述べている。

このように乃木の資質と戦術に対する評価は実に様々だが、乃木が旅順戦に勝利を得て、日露戦争の勝利に大きく貢献したのは歴史の事実である。

それにしても司馬の乃木に対する辛らつたもの言いはどこから来たのか。司馬は乃木をことごとくおとしめる一方で、まったく無名の児玉源太郎を持ち上げただけ持ち上げ、乃木と対比し、乃木をことごとく暗黒に見せている。そこまですておとしめなければいけない事情とはいったい何なのか。

確かに大正時代の一部の文化人には乃木のくさい演技や自意識過剰からくる過度の格好付けを嫌悪する向きもあったようだ。世間一般にも、乃木への批判は日露戦争

中から出ていた。しかし、明治の人々はその「戦下手」に憤りながらも心情的には乃木を許した。それどころか庶民は有徳の乃木を崇め、愛し愛したのだ。

日露戦争直後の日本国民による人気投票でも軍人部門では圧倒的に乃木が一位である。対して児玉源太郎は十五傑にも入っていない。これが当時の国民感情である。

司馬が「殉死」に続いて「坂の上の雲」を発表した昭和四十年代でも、乃木は道徳心の模範として世間一般に尊信されていた。私の記憶はここにあつたのだ。しかし、その世間を相手に司馬は十年以上その歳月をかけて従来の乃木像を覆し、新たに司馬史観による乃木像を築いたのである。

司馬の作品を見れば「坂の上の

雲」の秋山兄弟と正岡子規、「竜馬がゆく」の坂本竜馬、「燃えよ剣」の土方歳三ら、どの主人公に対しても司馬自身がはれ込んで書いている。それが司馬作品の底辺に流れている心地よさだ。しかし「殉死」の乃木だけは違う。

司馬曰く「日露戦争の勝利を境にして、日本人の理性が大きく後退して狂躁の昭和期に入る。やがて太平洋戦争をやつてのけ敗北する」。日露戦争から昭和にかけての日本を淡々と振り返る司馬だが、自身の体験から昭和陸軍に対して激しい憎悪の感情を持っていた。そしてその根を日露戦争の陸軍に見ていたのである。そこに乃木の「無能」という切り口を見つけ徹底的にこたわつたのではないだろうか。

「殉死」を書く一年前（昭和四十二年）に陸大兵学教官の谷寿夫なる人物の「機密日露戦史」が復刻された。その中で谷は「旅順では、乃木大将は伊地知幸介ともども無能であり、実際は着眼に優れた児玉源太郎が采配をして見事に攻略できた」と書いている。この内容に関しては、当時の上原勇作元帥が「旅順を攻略したのは名実共に乃木將軍だ」と明確に否定したにもかかわらず、谷はそれを無視して書き上げたのである。

兵士の教育現場では史実そのものを論じては前に進めない。

架空戦史を作り上げそれを事実と固定し、ある戦訓を引きずり出すことが肝要だ、というのが谷の言い分である。実際、信長の「桶狭間」が奇襲による見本として事実検討もされず、むやみに美化された軍人教育に使われたことはよく知られている。この論法である。

司馬の乃木に対する糾弾はこの「機密日露戦史」を根拠にしているのではないか。前述したように「機密日露戦史」復刻の一年後に「殉死」が、三年後に「坂の上の雲」が書かれているのだ。もしそうであれば、本当に乃木は無能だった

のだろうか。印象は大きく変わってくる。これらが書かれた時代は高度成長の走り、合理的で有能であることだけが評価されつつある世情だった。多くの利益を上げること、効率的であることが大事であった。有徳であることなど邪魔者扱いされ始めた時代である。この時代背景が、司馬史観による乃木像の定着に大きな力を貸したのは想像に難くない。そして今もなお人々はそれをそのまま受け入れている。

日露戦争後、軍部から一般市民まで日本国中がロシアに勝つたという浮かれ、奢侈と安逸の風潮が蔓延した。乃木は幼き昭和天皇の教育

経営管理講座 302 染谷和巳

私には乃木よりも参謀伊地知幸介の描写に疑問を感じていた。私が孫だったとする。お爺さんは偉かったと聞いている。その祖父が作戦能力がなく偏屈で頭が固くそのため一万人以上の兵をむだ死にさせた張本人だった。なぜこんな男が司令官を補佐する参謀だったのか。失敗を重ね死者を増やしたのはこの男のせいだと司馬は書いている。

伊地知の孫だけでなく親も親族も、犯罪者を持つ家庭のように世間に顔向けできず小さくなって暮らさなければならぬ。

司馬は人に会って取材したわけではない。柴田が指摘するとおり、偏つた資料を元に想像をふくらませて書いたとしか思えない。

それにしても一片の思いやりもない。非情酷薄にこてんぱんに書いている。伊地知を人でなし、国賊の類に入れていく。

やはり司馬の片寄りであろう。それとも明治維新の折、討伐された水戸や会津の人は長州（山口）の人を今も敵と見ているというが、それに似た遺恨でもあつたのだろうか。

研修の修了式で「優れた上司、

係に任せられていたが、その風潮を憂い若者相手に「勤勉」と「質素」の大切さを説き「奢侈と戦う覚悟を持つべし」と常に語りかけていた。

翻つて現代の私たちの生活はどうだろうか。それこそ奢侈と安逸で満たされているのではないのか。そしてそれが決まっていることではないことを多くの国民は知っている。それならば、もうそろそろ司馬史観の呪縛から解き放たれ、乃木希典の生き方を今一度見直してみたい時が来たと思うのだが、いかがだろうか。

中川製紙株式会社 代表取締役社長 柴田 明彦

立派な親になるため、国に対する誇りと祖先に対する感謝の心を持つてください。そのため歴史の勉強をしてください。司馬遼太郎や吉村昭の歴史小説から入るのがいいでしょう」と挨拶している。

その手前「坂の上の雲」は問題である。歪んだ歴史観になり、国と祖先を心から誇れない人になりかねない。

かといって学者の書いた本で歴史を学ぶ気にはなれない。やはり面白い小説から歴史を学ぶのが近道である。「坂の上の雲」は日露戦争で白人の世界支配を阻止した日本の偉人たちの物語である。私たちの歴史認識を直截変える。だからこれを一番に勧める。

その点、海軍の対馬沖海戦はいがが、陸軍の二〇三高地攻略はこのまま史実とされは困るのだ。尊敬できない乃木將軍や参謀、偉業をなしとげたにもかかわらず、それを正当に評価されず、無能と貶められた人物像では、何のため

の歴史の勉強が解らない。

雲上に向かって「司馬さん、困るよお」と叫ぶと、司馬遼太郎は「はは、小説なんですよお」と笑って答えた。

「正しい歴史認識を持つために

はは、小説なんですよお」と